まつりが育む地域の力

「まつり」が紡ぐ地域の絆

佐藤 友美子 ● *Written by Yumiko Sato* 公益財団法人サントリー文化財団上席研究フェロー

地域文化の振興に力を尽くした個人や団体を顕彰する「サントリー地域文化賞」は、今年で34回目を迎える。地域文化には様々なジャンルがあるが「まつり」はその中でも大きな位置を占めている。まつりには、特別の意味のある日がある。しかし、その日、一日がまつりなのではない。まつりを成立させているのは日常の営みであり、人間関係であり、地域の文化そのものである。

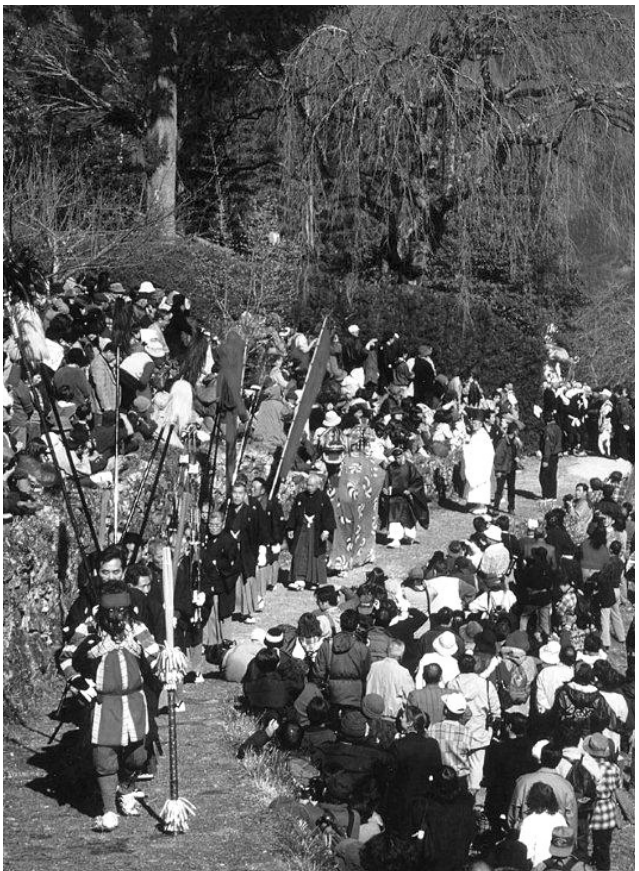
かつて、「まつり」があることで、人と人は自然に結びつき、地域としてのまとまりを作ってきた。しかし、人口減少期に入り、多くの地域で過疎化が進み、地域での暮らしそのものが難しくなっている。一方、都市部では人は沢山いるにもかかわらず、祭りどころか近所づきあいもないことさえ珍しくない。祭りはもはや、その役割を終えてしまったのだろうか。

守ること、変化すること

祭りを取り巻く環境は厳しい。少子化で継承する子どもたちの数は減り、神輿の担ぎ手の若い人がいない、というのはよくいわれることだ。後継者不足だけでない。地域の経済が疲弊する中、祭りを支える人たちの経済的基盤も磐石ではない。祭りを守り、継承していくとはどういうことなのか。祭りが紡いでいる絆とは何なのか。まずは伝統的な祭りを切り口に見ていきたい。

開くことで守ってきた 秋葉祭り

過疎と高齢化は、多くの地域に共通の課題である。210年の歴史を持つ土佐の「秋葉神社祭礼」は、最終日には旧仁淀村別枝地区の3集落から200人の行列が出て、早朝から夕方にかけて3キロの山道を練り歩く。小学校1年から中学3年までの子どもたちによる太刀踊り、火消し装束の若者が飾り棒を投



厳冬の2月、3キロの山道を200人が1日かけて練り歩く「秋葉祭り」

げあう鳥毛ひねりなど、若い人が主役のこの祭りにも少子化の波が押し寄せている。神事である祭りは、もともとは3集落の氏子のみが行うものであった。少子化で立ち行かなくなり、1975年、隣の別府地区の2つの小学校に祭りの参加者を「雇い」に行く習慣が始まっている。その後、祭りはさらに外部に開かれ、消防団や役場の協力を得て、別府小学校の生徒と里帰りした別枝出身者の子どもによって成り立っている。地区内外の人が入る保存会、練りの通り道の枝払いをする「によど雑技団」、祭りの縁で集まった人たちによる「秋葉まつりの里を元気にする会 えんこ巌(いわ)」。祭りの当日には人口150人、高齢化率74％の地区に1万人を超える人が訪れる。県内でも有数の祭りは外部の人たちによって支えられ、多くの人にとっての居場所にもなっているのである。

伝統的な祭りの形を頑なに守ろうとすると存続が難しくなる。長期的な視点を持って地域に開き、変化することによって、より大きく広がり、人々の絆を呼び込んだのである。

祭りの絆が新たなチャレンジを生む

黒川能

山形県出羽三山の麓にある櫛引町で伝えられる黒川能は500年の歴史を持つ。里の鎮守春日大社の神事として成立し、この地域の人々によって脈々と受け継がれてきた。この地域の人たちは「三代友達」と自分たちのことを称する。春日大社の氏子は240戸、町民の5割が三世代同居という三世代同居率全国一の地域である。家々には屋号があり、謡いや舞いという家毎の芸が、親から子へ、子から孫へと、今も受け継がれているのである。

この地の春は4月、地域を巡る能役者による「春告笛」で始まり、能と共に季節が、日々の暮らしが巡っていく。人に見せるための能ではないので花形役者はいない。神に捧げるための能は流行り廃りとは無関係に400曲が残り、今でも200曲が演じられる。

そのクライマックスは毎年2月1日から2日にかけて行われる王祇祭である。祭りの準備は1年越しで進められる。1カ月くらい前から「当屋(とうや)」に当たった関係者は物忌みに入り、供えるための食物は近所の人たちによって集められる。かつては個人の家に神を迎えたが、現在では当屋の負担軽減を考え公民館に神を迎える設えが用意される。当日はご神体を迎え、酒宴を開き、氏子たちはこの日のために稽古に励んできた能に興じる。その時に供される名物の「凍(し)み豆腐」は大豆の種を蒔き、育て、収穫し、豆腐を作り、焼き、味をつけるまですべてが氏子たちの手によって行われる。残った豆腐は今も各家に配られるが、食べ物が乏しい時代には寒い時期の食料として、人々の命を繋ぐ大切なものであったという。

そんな伝統文化を守り、生活のリズムとするこの地域にも様々な課題はある。農業だけで三世代が暮らしていくことは難しく、仕事を外に求めた結果、耕作放棄地が増え、畑は荒れた。地域には虫食いの後のように耕作放棄地が点在している。そんな状況を打開するため、8年前に大豆転作組合ができ、耕作放棄地を借り上げ、畑を維持し、王祇祭で使う豆腐の材料である大豆栽培に乗り出した。祭事で使うだけでなく、少しでも家計の足しにしようという試みだ。祭りの絆が、生活を支える次の絆へと発展しつつある。黒川能は、季節を告げるだけではなく、命を繋ぎ、地域が生き残るための力ともなっているのである。

＊新しい「まつり」が心を繋ぐ

まつりと地域の文化は密接に繋がっている。地域文化賞の生みの親であり劇作家でサントリー文化財団副理事長の山崎正和氏は地域文化の発展段階を4つに分けて説明している。地域が自然発生的に文化を生み出し、伝統芸能が生まれた時代は「地域が文化をつくる時代」であった。次に出てきたのが地方から都市に出た人たちが合唱団のように仲間を集め、組織を作って頑張った「地域で文化をつくる時代」である。次が文化を使って地域振興をしようという段階「地域を文化でつくる時代」であるという。そして、今、普遍的な価値を追求し、「文化で世界と繋がる時代」がきていると。ここでは地域文化であるまつりの新たな役割について考えてみたい。

マイナスをプラスに変えた なら燈花会

今や奈良の夏の風物詩となった「なら燈花会」。始まったのは１９９９年、まだ10数年の若いまつりである。

奈良の課題として挙げられていたのは、努力しなくても大仏のおかげで観光客が来るという「大仏商法」。京都や大阪という大都市が近いということもあり、観光客は多いが日帰り客が多く、奈良県の宿泊数は日本で最下位であった。店の閉まる時間が早く、夜は暗い、美味しい店も少ないといわれてきた。

奈良の青年会議所がそれまで10年続けてきた夏のイベントの見直しの中で、奈良の欠点であった「何もなさ」「夜の暗さ」を、「静けさ」「安らぎ」という長所と考えようとする「なら燈花会」が企画された。奈良では東大寺二月堂のお水取りや、春日大社の万燈籠など、古くから火を使った行事が多く、宗教行事としては自然なものであった。しかし、火を使うことに対する抵抗、新しいことをする意味が理解されず、スタート時には寺社などの協力は残念ながら得られなかったという。

「奈良らしさ」を大切にしたい、との思いから始められた燈花会は、６６０ヘクタールという広大な公園を舞台に、８００人のボランティアが６０００本のロウソクを灯し、期間中には予想を上回る17万人が訪れた。今では寺社や商店街の協力も得られるようになり、夏枯れの奈良の救世主ともなっている。

「燈花会」の特徴の一つは誰でもが主役になれることだ。会期中の都合のよい日にロウソクなどを用意する「当日サポーター」は延べ４０００人にもなる。親子での参加も多く、子どもたちが元気に自分の持ち場を守っている姿は微笑ましい。「一客一灯」というシステムもあり、当日５００円でロウソク一基を灯すことができる。

「なら燈花会」が始まってから、奈良には年々お洒落な店が増え、夜の魅力も増してきた。奈良の魅力を住んでいる人たち自身が見直すきっかけにもなった。人から見られることで、町は磨かれ、光りを放ちだす。２０１０年の奈良１３００年祭の大成功もこうした市民主体の動き、横の繋がりがあったからこそといえるだろう。

ロウソクの灯に浮かび上がる東大寺。夏の風物誌となった「なら燈花会」

世界と繋がる コスキン・エン・ハポン

昨年37回目を迎えた日本最大のフォルクローレの祭典である「コスキン・エン・ハポン」は原発被害の渦中にある福島県川俣町で例年通り10月に開催された。このフェスティバルの萌芽は60年以上前に遡る。中南米音楽の愛好家であった川俣町在住者が演奏家と交流を始め、アンデスの山の中の町コスキンで毎年行われる「コスキン祭」の日本版を企画、１９７５年、第1回のフォルクローレの祭典が開催された。最初は1日だけだった開催が、参加人数の増加により、2日となり、今では3日間行われるまでになっている。福島市街地から離れたこの地で海外の文化が自然に受け入れられたのは、川俣町が古くから絹製品の加工が盛んなところで、海外との交流が盛んに行われていたことと無関係ではない。

愛好家の楽しみで始まった小さな祭典は、サントリー地域文化賞を受けた93年頃には民族衣装で町を練り歩く「コスキンパレード」が行われるまで根付き、町立小学校では４年生全員がケーナの練習を受けるなど、川俣の人たちに愛される存在となっている。

昨年３月の大震災では建造物の被害だけで

町中がフォルクローレで盛り上がる「コスキン・エン・ハポン」

なく、放射能の影響もあり、開催が危ぶまれた。事務局長を務める齋藤氏は震災で打ちひしがれる中、日本のみならず、海外からも安否を気遣う多くの声が寄せられたことに感動し、不安を乗り越え開催を決めた。地域が支えてきた文化が、世界の人に愛され、文化によって世界と繋がっていると実感し、次の世代に引き継いでいく責任を感じた、と熱く語っている。東北の小さな町は、まつりを通じて世界と繋がっているのである。

＊「まつり」が繋ぐ絆

まつりには、多様な種類、様々な形態がある。しかし、多くの共通点もある。まつりには目標とすべきゴールがある。そのために日々の積み重ねがあり、多くの人による共同作業がある。経験者から初心者にノウハウが引き継がれる。それぞれが自分の持ち場で、やるべきことをする。大事なのは、まつりの日ではなく、むしろそれを実現するためのプロセスといえるかもしれない。まつりは、人を鍛え、人を結ぶシステムなのだ。

まつりは仕事ではなく、楽しみである。だからこそ、様々な人が参加し、自分なりの達成感を得ることができる。まつりのクライマックスまでのプロセスを共有することで、信頼関係が醸成される。まつりで生まれた柔らかでしなやかな結びつき、絆が、これからも社会を支えていく小さいけれど確かな力になるのは間違いないだろう。

CEL

佐藤 友美子（さとう・ゆみこ）

公益財団法人サントリー文化財団上席研究フェロー。1951年三重県生まれ。75年立命館大学文学部卒業。同年サントリー株式会社に入社。小泉首相の観光立国懇談会をはじめ、中央環境審議会委員、国土審議会委員などを歴任。主な著書は、『つながりのコミュニティ』（岩波書店）、『成熟し人はますます若くなる』（NTT出版）など。